内裏歌合　康保三年八月十五夜大盤所にて前栽合ことありける　闘 紀略

題

歌人

左 絵所　　右 作物所二壺よりまきてたへたり

左

きみかため花うへそむとつけねともちよまつ虫のねにそなくなる

右

心してことしはにほへをみなへしさかぬ花そと人はみるとも

御製

花坂のこゝろもあらそふとならなる月さへゝ無る秋のまれる哉

乃花もまくはまよそ世へ乃なかあはれかな

右大将藤原師尹朝臣

時さゝの花色あすての常ならむもきぬをきとをる松乃よの月

右兵衛督藤原朝成朝臣

野も山も空あかるらしあかひかる松乃ちとせと共にゆつゝて

右京大夫源博延朝臣

いかもゆく秋をハ千遍と白露れをきてかひある宿にそ在遍

右近中将源博雅朝臣

頭中将源延光朝臣

冬まちまちもひまされ秋の色もれるまま地月影るかに見える

右中弁源保光朝臣

春とても月影宿にまさるちよ千年ともあかぬ花乃宿なるを

近江守藤原國光朝臣

月影のいつるぬるはも今よひ社さかけにける遠きぬまて露

左京大夫藤原守家朝臣

池水乃底にうつれる花み遠かちるまかへ乃なかりけるかれ

右兵衛督藤原忠君朝臣

ちる風の花乃色まく月影すまかはさへ八千代乃秋

大宰大貳藤原佐忠朝臣

千とせの妹かしる花の色はもとは月乃影なれまとれみる

讃岐権守藤原清遠朝臣

月ならは瑠璃の花の色とこそ秋の夜はさらにくもらさらなん

左近権中将源時明

ともすれはしくるゝ風のおとたにも人はこゝろのうつるめるみえにけり

右近将監藤原為光

年をへて咲くむしのねもしけきまてすみてかひあるよはなくなん

東宮学士大江斉光

月影のさやけき秋をうれしくそおもひしかとも花の名残もや

衛門佐藤原

花も色も秋のよの月影にまさりてそおもひ乱れけり

大和守藤原安親

秋の夜のつきはかはらて千代をへてなかきよすから月のかけにみゆるかな

右兵衛佐源時中

かはかりのよをすくすへき秋風の秋のよのかけのかそへん

散位藤原高遠

年をへてくもりなき秋の月のかけ月の秋にもあかすやあらん

紀伊守紀文利

万代の秋をまちてそ花の色もかはらぬ月の影をみるかな

式部丞藤原共政

花の色もいろに見えける秋の夜の月の影をそ人

右衛門督源のみちとも
水無瀬山月と人はなかむる秋のよすから花にのこれはなかめつゝすれ
主殿助藤原為光
吹風にさそはれちらぬ花とてもまちかひとゝめぬ秋のよの月
左馬助藤原永頼
かへてみる花の色みつかひをあるはさやまた月にかへるらんのまくら
藤原ときよ
かしまにいまはさかりとはしきやちらぬ秋のまなかめしまかなみ
大江通雅
九重に咲そめにける花と月をちとせの秋はいろもかはらし

右近の命婦
九重にまよひそめぬるをみそしらすきぬもみゆるつらさかな
介の命婦
秋風の秋の花のいろくにみゆる月にもくもも雲のうへまてく
兵庫蔵人
野辺ちかきゆふへの花の色も月のひかりもまたなひくらへて
小貳の蔵人
秋のよの月のひかりもひかりそへていろあるの花のおもかけ
兵衛の蔵人
春の夜の月にかすみて花にほふ色そつもれるしらくものまつ

大弐の藏人

秋乃夜もをしきこよひの月かけに逢ふ花の露をもらさしとそ思ふ

清つの藏人

月影のさしも絶せぬ秋なれはそらも花の色にはるらし

はりま乃藏人

秋のよ乃つゆのおきあかす月影はのとかに花の色そ添ふ

見えよかりつ

右根合以木村孔恭龜年書寫之校畢

東三條院瞿麦合

七月七日皇太后宮にたまはりて一あはせさせ給ふ

左頭少将乃なまいしやま乃井の中将おほせまた

以少将のおほと宮信乃少将とこちよ装束は左の

ふさへよるかはうみたる乃あやの衣とへうすもなてたま

乃うへしたあかくほそたまをすめ乃うちとそ乃をも

あをいろおもてあかう乃ともとものうらかたきぬ方

人なとしおほれあやの衣とへうす絹をかさはゐる

乃うらきつぬいろとものをすそまおまへはよしかえ

いつるよしは仁人おさきぬともへうすみ乃あを一みへり